

ヴァイニング夫人と語る

田 村 晃 康

客員研究員としてフィラデルフィア郊外にあるスワズモア大学に来て、早くも半年以上が経った。今回の研究テーマは「アメリカ文学におけるクエーカーリズムの影響」という大きなものである。最初の3ヶ月は、クエーカーリズムとその歴史に関する自分の知識をより確かなものにするために費し、その後の3ヶ月近くは、^{きんじょう}今上天皇の若き皇太子時代の家庭教師であり、かつ、20世紀の最もすぐれたクエーカー作家であるヴァイニング夫人の研究に主力を注いできた。

本来なら、時代順に古い作家から取り上げるべきところであるが、あえてその順序を逆にしたのは、いささか理由がある。実は、この7月まで本学の教養部で教鞭をとっておられたモーガン・ギブソン教授の母堂がヴァイニング夫人の亡き夫君のいここに当ることから、私はギブソン教授から、ぜひ夫人にインタビューするようにと勧められ、住所まで教えてもらっていたのである。お会いするからには、十分内容のある話や質問をしたいと思い、夫人の著作を先に手がけたわけである。

ヴァイニング夫人と言えば、『皇太子の窓』で世界的に有名になったことは多くの日本人が知っているが、夫人がまた児童文学、本格小説、伝記、宗教的エッセイ、クエーカー史などの広範な分野で非常にすぐれた仕事をした作家であることは、ごく一部の人々以外には、ほとんど知られていない。また、皇室との関係でジャーナリズム

ムがあまりセンセーショナルに騒ぎ立てたために、かえって潔癖な文学の専門家からは敬遠され、本格的な研究の対象とはされていないようである。このたび調べてみて、日本でもアメリカでも、ヴァイニング夫人に関する単行本や研究書が1冊も書かれていないことを知ったのは意外であった。しかし、夫人の30余冊の著書を読んでもみると、その多くが実にすぐれた、珠玉のような作品なのである。『皇太子の窓』を初めとするいくつかの著作が多くのアメリカ人の日本に対する認識を改めさせ、日米関係の改善に大きな貢献をしたことを考えると、夫人は日本が忘れてはならない作家であろうと思われる。

9月の初旬、夫人の著作を、どうしても手に入らない初期の作品1つを除いて全部読み上げたので、夫人に面会を求める手紙を出した。ところが、3週間経っても、4週間待っても、何の返事も来ない。そう言えば、数週間前に夫人の母校である布林・モア・カレッジの図書館を訪ねた折、アーカヴィスト（古文書係）のリッテンハウス夫人が「ヴァイニング夫人は最近病気がちのようですよ」と言っていたのを思い出す。そこで心配になって、スワズモア大学のすぐ近くにあるペンドル・ヒル（クエーカーの研究・成人教育センター）のユキ・ブリントンさんに「夫人はまだ避暑地におられるのですか、それとも入院でもされているのですか」と尋ねてみた。ユキさんは、ヴァイニング夫人の日本滞在中秘書をされた松村（旧姓・高橋）たね女史の姉であり、夫人とは常に緊密な連絡を保っておられるように見受けたからだ。「ヴァイニング先生は、今は入院されておられませんが、かなり弱っておられるので、ごく一部の親しい人たち以外にはお会いになりません。手紙にも返事が出されないでしょう」との答えが返ってきた。そのとき、私は面会をほぼあきらめて、ギブソン教授に「どうやら夫人に会うには、来るのが一、

二年遅すぎたようです」と手紙を出した。

ところが、突然、夫人にお目にかかる機会に恵まれた。先にふれた、ヴァイニング夫人の元秘書である松村たね女史が、11年ぶりに夫人に会いにアメリカに来られたからである。たね女史は、その献心ぶりと有能さによって夫人の絶大な信頼と愛情を勝ち得、夫人が著書の至るところで、口をきわめてほめている方である。自叙伝『静かなる巡礼』の中では「私の妹」とまで呼んでいる。今回の訪門の表向きの目的は、礼宮様のご婚約が整ったことの報告とのことであるが、真意は、夫人がまだかなりお元気なうちに、ぜひもう一度お会いしたい、ということだったようである。

9月末、ペンドル・ヒルに座禅に行きユキさんに会った折、「もしお時間が空いていたら、10月4日の水曜日、妹と私をケンダルのヴァイニング先生のところまで車で送っていただけませんか」ときかれた。私が夫人に会いたがっていること、および夫人の著書を通じて妹のたね女史を深く尊敬していることを知っての好意である。もちろん、私は承知した。すると、翌日ユキさんから電話があった。「ヴァイニング先生が、田村さんも一緒にランチをするようにとおっしゃっていましたので、どうぞそのおつもりで」という、思いがけない話である。きっとユキさんが、私のために大いに口添えしてくれたのである。

10月4日、私はユキさん姉妹を、スワズモアから車で30分くらいのところにあるケンダルにお連れし、そこでヴァイニング夫人にお会いした。

ケンダルは、富豪ピエール・デュポンが設計し、完成した壮大なロングウッド・ガーデンに隣接する、隠退した老人たちのコミュニティである。入居者は、それまで社会の第一線で活躍していた人が多く、本館に入ると、廊下を行き交う人々はみな老人とは思えない

明るさ、元気さで、はつらつと動き、語り合っている。日本の老人ホームにみられる、わびしい陰気な感じは全くない。

応接室に來られたヴァイニング夫人は、確かにかなり弱っておられるようであった。歩くのもけっして楽ではないらしく、ゆっくりと一歩一歩注意深く足を運び、声はやや小さく、少しかすれていた。夫人は背の高い方で、若い頃の写真ではいつも背筋をまっすぐに伸ばしておられ、気品にあふれていたが、今は心もち背を丸めて歩いておられる。何度か重い病気もされたのであろう、深いしわの刻まれた顔には、病苦の影らしいものが残っている。しかし私たちに会ってからは終始にこやかな笑みを絶やすことなく、精いっぱい明るい声で話され、現在は特別痛む部分や重い病気はないように見受けられた。もちろん、私がこれまで新聞や夫人の著書のカバーの写真で見たどの顔よりもずっとふけて見える。しかしそれは当然であろう。なにしろ、もう87才なのだから。その実際のお年からみたら、何と若々しいことであろうか。ここ2・3ヶ月、もっぱら夫人の著作に親しんできた私には、その深いしわと病苦の影の下に、夫人の気高い純真な精神と、日本に対して抱き続けた謙虚でおおらかな、温かい愛情がはっきりと透けて見えるように感じられた。

私たちはちょうど正午に食堂に行った。天井が、飛驒高山の商家のような吹き抜けになっていて、黒々と磨かれた太い柱や梁が見えている。広々とした気持ちのよい食堂である。たしか、北側はすべてガラス張りになっていたと思う。外の広々とした芝生は、ゆるやかに波を打ちながら、わずかに下降しつつ北の方にのびている。そして芝生のところどころには、黄葉しかけた数本のすばらしい巨木が点在している。アメリカン・シカモア（すずかけ）やシュガー・メイプルであろう。その2日前にはひどい雨が降ったが、この日は澄み切った空には一点の雲もなく、空気がさわやかで、きらめいて

いた。

食事はセルフ・サービスながら、さまざまな料理・ごちそうがコースごとに別々のテーブルに並べられていて、まるでパーティかと思うくらいの豪華さである。ヴァイニング夫人は、1コースごとに先に立って料理のあるテーブルに行かれ、私たち1人1人にお皿を取って手渡してくれた。

私たちはゆっくり食事しながら、さまざまな話題について語り合った。まず夫人とたね女史の間で、共通の友人や皇室関係の人々の消息についてひとしきり話が交されると、そのあと話題は、美しい窓外の景色のこと、ロングウッド・ガーデンとそれを造ったデュポン一族の公共的精神のこと、夫人が若い頃夫君と過ごしたチャーチ・ヒル（ノース・キャロライナ大学の所在地）のこと、さらに夫人の最近の生活などに及んだ。

夫人はすでに数年前から執筆活動をやめており、現在は探偵小説を読むのを大きな楽しみにしているという。「250冊以上の探偵小説を書いた日本の作家は誰でしたっけ」と尋ねられたが、江戸川乱歩と横溝正史の名前くらいしか知らない私たちは、その2人がそれほど多くの作品を書いたとも思えず、結局、誰も確答はできなかった。

この日、私は主客ではないので、あまり出しゃばって話しすぎないように、また、かねてから用意していた沢山の質問で夫人を悩ますことはしないように自重したが、それでも他の2人の客人に劣らず、あるいはそれ以上に会話に参加したように思う。話がギブソン教授にふれたとき、夫人が「2人の赤ちゃんはどんなですか」ときくので、「いえ、もう赤ちゃんではありません。3、4才の坊やです。あゝ、その顔の利口そうなこと!」と言うと、「それは当然ですよ。あの2人があんなに賢いんですから」と目を細めておっしゃる。今ではギブソンさん一家が多分夫人に一番近い身内で、それだけにギ

ブソンさんたちへの愛情には深いものがあるのであろう。

私はまた折にふれて、夫人の著作に対する自分の感想も話した。夫人がすぐれた作家であるとともにすぐれた歴史家でもあって、特に『ルーファス・ジョーンズ伝』はその2つの資質が結びついた傑作で、フロスト博士（スワズモア大学教授で、現代の代表的クエーカー史家）も著書で言及していること、私はこれまで南北両キャロライナ州のことは全く知らなかったが、その2州の植民地時代を舞台にした『メギイ・マキントッシュ』や『チャールス・タウンのベッピー・マーロウ』など、夫人のいくつかの物語を読んで、今ではその両州がすっかり身近に感じられるようになったことを話すと、「ありがとう」とおっしゃって、とてもうれしそうであった。

特に強く印象に残っているのは、夫人の自然への愛情にふれたときのことである。私が「あなたの文学の最も顕著な要素は、自然愛であるように思われます。実は、私にとってあなたの作品を読む大きな喜びの一つは、至るところで美しい自然描写に出会うことなのです」と言うと、大変喜んで、「それが私の文学の真髄なんですよ (That's what my writing is all about.)」とおっしゃった。さらに、「実は、私はあなたの後期の作品を先に読んだので、ひょっとしたらあなたの自然愛は、日本文化にふれたあと、その影響で強められたのではなかろうかと思っていました。ところがとんでもない。大学卒業後数年してお書きになった処女作『メレデス家のアン』の中にすでに自然描写がふんだんに出てき、主人公の少女アンは小鳥の観察を趣味にしています。『フェア・アドヴェンチャー』では、主人公の姉の、まだ小学校にも通っていない娘たちが、本棚に野草の本を見つけて、その中からわざと汚らしい花の名前を探し出しては、いやがる友達のあだ名にして楽しむという場面が出てきますね。あなたの自然への関心はずい分早くからのものなのですね」と

言うと、「よくそこまで気をつけて読みましたね。そうです、私の自然愛は、もう生まれつきと言ってよいようなものなのです」と言われた。

私が夫人のフィクションの中で最も高く買うのは、若き日のジョン・ダン（17世紀の形而上詩人）を扱った小説である。エリザベス女王やジャームズ一世の生き生きとした人物描写とともに、ロンドンの四季の自然がいかに鮮やかに描かれていて、私は読みながら、あたかも自分が当時のロンドンにいて、歴史を目の当りにしているような気がしたものである。そのことを話すと、「あれは、私自身、書きながら同じように感じた作品なのです」と言われた。やはりこれは、夫人の作家としての想像力と筆力とが充実し切った、絶頂期の作品なのであろう。

「それにしても、クエーカーであるあなたが、ジョン・ダンの若い頃の放埒な愛に関心をもたれていたことには驚きますね。どんなきっかけで、ダンの若い頃の生活を知ったのですか」ときいてみた。多分、詩に関心があったので、まず彼の詩に引かれ、それから伝記を読み出したのであろうと、私は内心予想していた。夫人は笑いながら、「でも、私は最初からクエーカーだったわけではありませんよ」とおっしゃる。

「知っています。しかし、あなたは若い頃からクエーカーの教育を受けているでしょう」

「私がジャーマンタウンのクエーカー・スクールに学んだことですか」と言う。そうだと答えると、「私の家には書斎がありましてね、父がいろいろな本を持っていたのです。私は書斎へ行って、手当たりしだいに本を読みあさったのです」と言われた。夫人の父君は機械技師で、のちに社長になった人であるが、終生文学書も愛読していたという。ジョン・ダンのような一般向きでない詩人の、しか

も文学史の伝えないような、若い頃の生活を描いた伝記まで読んでいたとすれば、やはり並みの人物ではなかったのであろう。

私は、夫人のもう1つの注目すべき作品である『私・ロバータ』についてもきいてみた。

「あなたのフィクションの中で、『私・ロバータ』はきわめて特異なものです。まずテーマが重婚という、深刻な問題を扱ったものであること、それから文学的な技法を意識した唯一の作品であるという、この二点からです。他のすべての作品においては、あなたは全く自然に、たくまずに、物語や事件を時の経過通りに展開し、叙述していますが、この作品では、主人公の女性が、失踪していた自分の夫が他の女性と結婚していたことを知らされるという、きわめてショッキングな場面から物語が始まります。読者は、その背景にあった事実やロバータと夫の心理的關係を、主人公の内省という形で序々に知らされていくわけです。この作品でのみ、このような技法を試みられたのには、何か理由がありましたか」

すると夫人は、感心したような面持ちで、「なるほど、あの作品をそんな風に見ることができるんですね。私自身はそうした技法は全く意識していませんでした。実は、私はあの頃、ある家庭の問題をかかえていて、それから逃避するつもりであの作品を書いたのです」と、意外なことを言われた。

食事がすむと、夫人は「宝物が見たいでしょう」とおっしゃって、私たちを御自分の部屋に連れて行ってくれた。それは、メイン・ハウスの玄関を出て、建物を西の方にぐるりと回った裏側にある、ごく質素な長屋風の平屋の一室である。「エリザベス・ヴァイニング」という小さな表札の掛けてあるドアを入ると、そこがもう居間兼客間であった。部屋はほかに、左手に書斎を兼ねたベッドルームが一室あるかぎり。その狭さといい、家具や装飾の質素さといい、今私

が住んでいるアパートとほとんど変わらない。夫人がここに移る前に住んでいたのは、今はペンドル・ヒルが買い取ってそのキャンパスの一部になっている、大きな石造りの2階建ての家であった。長年の著作活動のためだけでも、どれほど多くの蔵書を集めたか計り知れないが、夫人は日本滞在のほかにも、幾度かイギリスやスコッ

プロの作品としか思えない。思わず「これが美智子妃の描かれた絵なのですか」ときくと、「そうです。あの方はさまざまなすばらしい才能をお持ちなのです」と、夫人は敬意のこもった口調で答えられた。

あるエッセイで、夫人とたね女史と2人で河井寛次郎を訪ね、その作品を1つずつもらって帰ったとあったのを思い出し、「今でもありますか」ときくと、「えゝ、ありますよ」と言って、隣の「書斎」に案内してくれた。奥にベッド、手前の右手に机があって、その机の上の、作りつけの書棚の上に、二つのかなり大きな花器があった。渋い濃紺の無地のものが河井寛次郎からもらったものだという。「ほう、河井さんのものとしては変わっていますね。私が今まで展覧会や美術館で見たものには、こういうものはなかったですよ」と言うと、「これは彼の初期の作品だそうです。でも、もう1つ河井さんのものがあります」と言う。また元の部屋に戻って私に示したのは、宝物の棚にのっている、高さ15センチくらいの、小さな口のついた四角張った花器である。淡い呉須釉の上に渋い赤で草花が描いてある。「あゝ、これが河井さんの典型的な作品ですね」と言うと、夫人はうなずいた。書棚の上にあったもう1つの花器はマシコ（益子）だと言うので、「というと、浜田庄司のものですか」ときくと、そうだと言う。「浜田庄司は私も大好きで、もう10年くらい前になりますが、名古屋で彼の個展が開かれたとき、家内と見に行きました。そのとき、彼もそこに来ていて、彼が話すのを聞きましたよ」と言うと、目を輝かせて、「そうですか。まだ生きておられますか」と言う。「いえ、数年前に亡くなりました。名古屋で私たちが見たのが最後の展覧会になりました」

そんな風に、他にもいくつかあった興味深い陶器について話していると時の経つのを忘れて、気がつくと時計はもう2時半を指して

いた。そこでユキさんと私は、旧交を温めるためにケンダルに泊るたね女史を残して夫人にいとまを告げた。別れ際に、私が心からお礼を申し上げると、夫人は「お話しができて楽しかったですよ。またいらっしゃい」と言ってくれた。

2日後、友人の車でケンダルからニューヨークを訪れて、それから日本に帰るというたね女史に、ニューヨークまで合流したいというユキさんを、再びケンダルまで車で送ってあげた。ヴァイニング夫人もたね女史を見送りに玄関先まで出て来られ、私の姿を見ると、「またお会いしましたね。ぜひまた来て下さい」とおっしゃる。すると、横にいたユキさんが日本語で「先生は大変楽しかったらしいのよ。一度と言わず、3度でも4度目でも来てあげて下さい」と言う。望外の幸せである。ぜひ帰国前に、またお訪ねしたいと思っている。

(1989年10月15日、スワズモアにて)